

## 学生教員座談会

### ジュンク堂書店池袋店特別企画

### 「立教大学文学部書店」から史学科の学びへ

#### はじめに

立教大学文学部は、ジュンク堂書店池袋本店と連携し、二〇一九年四月二五日（木）から一月八日（金）まで、「立教大学文学部書店」池袋に文化の灯台を」を開催しました。本企画は、ジュンク堂書店池袋本店が二〇〇三年から定期的に行っている「作家書店」という企画の一環です。これは、本に深く関心を寄せるさまざまなジャンルの著名人が七〇〇点程度の選書から書棚レイアウトまで売り場をプロデュースする「店長」になるという趣旨のもので、教育機関を店長とするのは初のことです。今回の「立教大学文学部書店」では、立教大学文学部の所属教員約六〇名が、学問の入り口となるような本から自身の専門分野の本まで、幅広い分野の本を約七〇〇点選書しました。

この座談会は、右記の「立教大学文学部書店」に本学文学部の教員が選んだ書籍（選書）のなかから、三名の史学科の学生の方々に興味のあるものを選んで読んで頂き、その本の内容を紹介するというものです。三名の学生は、文学部史学科の日本史学専修、世界史学専修、超域文学専修から一名ずつ選びました。「立教大学文学部書店」では、「専門に上がるまでの一般教養として読んでおきたい本」、「学部にかかわらず読んでほしい本」、「読んでほしい専門の本」という選書テーマが設けられています。学生のみなさんはそれぞれ、この三つのテーマについて一冊ずつ、計三冊を選びました。以下の座談会では、この三つの選書テーマにそって、話を進めてゆきます。その前に、まずは学生と教員の自己紹介からお読みください。

## 学生と教員の自己紹介

鈴木…世界史学専修西洋近現代史ゼミに所属しています、学部四年の鈴木成美といいます。よろしくお願いします。ゼミでは、一九世紀イギリスの粗悪品問題、質の悪い食品の問題とその規制について卒業論文で取り扱う予定です。

青木…超域文化学専修アメリカ社会史ゼミの所属の青木涼馬と申します。学部三年です。今年度、卒業論文予備論文のテーマとして、二〇世紀初頭アメリカの都市計画を調べています。今はまだ最初の段階なのですが、都市計画に携わったベンジャミン・マーシュという人物を調べようと思っています。

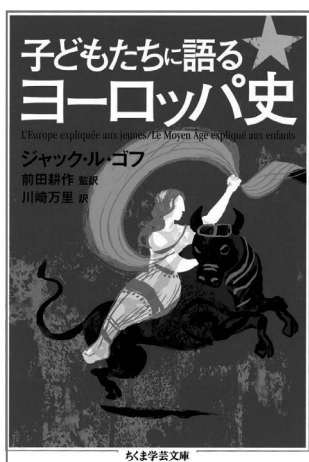
田中…日本史学専修中世史ゼミに所属している、学部四年の田中勇作です。研究テーマとしては、院政期と呼ばれる中世初期、およそ一二世紀後半の公家社会、つまり最上層の人間関係とか、それと政治の関わり、大小さまざまな権力のあり方、それがいかにして源平合戦へと向かってゆくのかを調べています。

松原…超域文化学専修アメリカ社会史ゼミを担当している松原宏之です。専門は近現代アメリカの政治文化です。

高林…世界史学専修西洋近現代史ゼミを担当している高林陽展です。専門としているのは、近現代イギリスの医療や身体 of 歴史です。特に、精神医療の歴史に関する研究について多く書いてきました。

「専門に上がるまでの一般教養として読んでおきたい本」について

鈴木…私が選んだのは、ジャック・ル・ゴフ、川崎万里訳『子どもたちに語るヨーロッパ史』（筑摩書房、二〇〇九年・原著二〇〇六年）という本です。



ジャック・ル・ゴフ、川崎万里訳『子どもたちに語るヨーロッパ史』（筑摩書房、二〇〇九年）

鈴木…この本は、子どもたちに語るということで、まず使われている用語がとても平易です。前編が「子どもたちに語るヨーロッパ」、後編が「子どもたちに語る中世」という構成になっています。後編は、会話形式になっています。章の最初に問いかけがあって、それに対する答えが端的にまとめられています。歴史が好きじゃないとか、歴史の知識があまりないって人でも取っ掛かりやすい本だと思いました。これは私自身の問題なのですが、ヨーロッパ中世史がとても苦手というか、とってもごちゃごちゃしていて分かりにくかったイメージがあって、高校生からずっと苦手意識があったのですけど、その私でも結構読みやすかったです。それから、読んでいて面白いと思ったのが、著者のル・ゴフはフランスの歴史家なんですけど、フランスの人から見た世界史みたいな視点がとても多かったんです。特に、人権の話ですと、ヨーロッパで初めてできた思想だとか、EUの話だと、統一ヨーロッパみたいな言い方をしている、フランス的な世界観を感じて、面白かったです。

松原…実際に書店で、どういう基準で本を探し、選んだのかも教えてくれませんか。

史苑（第八〇巻第一号）

鈴木…一般教養という基準というよりは、先ほども言ったように、私はヨーロッパ史の中でも、特に中世が苦手だという意識があったので、私が理解するために、何から読もうかと考えて選びました。

高林…ヨーロッパ中世は、もう一步具体的に言うのと、なにが苦手にさせていたんでしょう。

鈴木…国の境界が曖昧なところでしょうか。国や人間のあいだの関係も、親戚関係で成り立っている部分があるので、その辺がすっぱり、自分の中で意識がいかないというか。

松原…苦手意識っていうか、ちょっと縁遠く思っていた鈴木さんにとって、読んでみると思いのほか面白いとか、何かちよつと分かっちゃうというのは、どうしてだと思いますか。

鈴木…とても柔らかな表現で書いてあるので、用語とかは分かりやすかったです。

松原…フランス人らしい部分というのは具体的にはどうい

うところでしょうか？

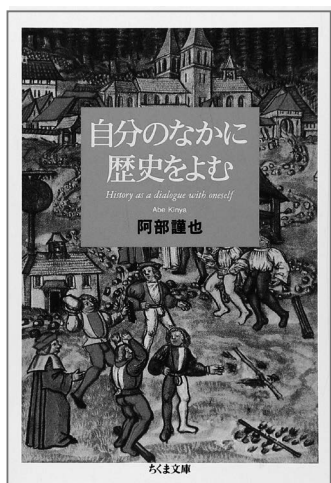
鈴木…たとえば、ゲルマン人の「民族大移動」に関する箇所です。それをル・ゴフは、「大進入」と書いていました。フランス人の視点からすれば、そう呼ぶのかなと不思議に感じました。

高林…フランス人はローマ帝国の視点から見て、そう言っているんじゃないかね。

鈴木…そういうことも関係しているかもしれませんが。この本は、タイトル通り、フランスの子どもたちに宛てている部分があります。ただ、そのとき、フランスの学校ではラテン語を学ぶことはよいことだと、ル・ゴフは書いていました。

松原…とても面白いですね。ル・ゴフは、ラテン語がないとつながるべき世界につながらないって考えていたのかもしれません。

青木…わたしは、阿部謹也『自分のなかに歴史をよむ』（筑摩書房、二〇〇七年）を選びました。



阿部謹也『自分のなかに歴史をよむ』（筑摩書房、二〇〇七年）

青木…わたしがこの本を選んだのは、文学部書店にもあった阿部謹也の『ハーメルンの笛吹き男…伝説とその世界』（筑摩書房、一九九九年・初版一九七四年（平凡社））を読んだことがきっかけでした。この本を読むと、社会史という言葉がよく出てきます。この社会史っていう言葉は、史学科のいろいろな講義でよく出てくるんですけど、何だかよく分からないなと思います。それで、図書館で関係図書を読みました。そこで阿部謹也は社会史のすごい人らしいというのを知って、『ハーメルンの笛吹き

男』を読みました。そうしたら、社会史っていうのが思いのほか面白かった。特に、心性史というアプローチは、自然科学、人類学、民俗学などを包摂しているように感じ、とても面白かったです。ただ、『ハーメルンの笛吹き男』はちよつと難しかったです。そこで、もうちよつと阿部謹也の読みやすい本を読んでみようと思い、『自分のなかに歴史をよむ』を選びました。

松原…この本は、自伝的な著作ですね。

青木…そうですね。ところどころヨーロッパ史の『ハーメルンの笛吹き男』の補足のような箇所もありました。この本の『自分のなかに歴史をよむ』というタイトルは、手に取ったときは、すごい不思議だと思いました。でも実際に読んでみたら、タイトルの意味が分かるようになっていて、面白かったです。

阿部謹也は一橋大学経済学部に入って、上原専祿さんという歴史の先生に出会い、歴史学に目覚めたそうです。その上原先生から手ほどきを受ける中で、歴史学を学ぶときに、何百年とか何千年とか前の時代を生きていた人を研究するのは、どうしてもその人のことを他者として、何か客体化して見てしまうが、実はそうではない

ということを考えるようになります。自分が研究する対象と自分の間には、何も関係がないみたいに考えてしまいうことが普通だと思うんですが、上原先生の手ほどきを受ける中で阿部謹也は、今から何百年も何千年前も生きていた人たちを研究するにあたって、何かしらその人たちが生きた時代のことを自分の経験として内在化させるべきだと考えたそうです。一度内在化して突き抜けないと、その研究対象のことは本当には分からないということでしょうか。

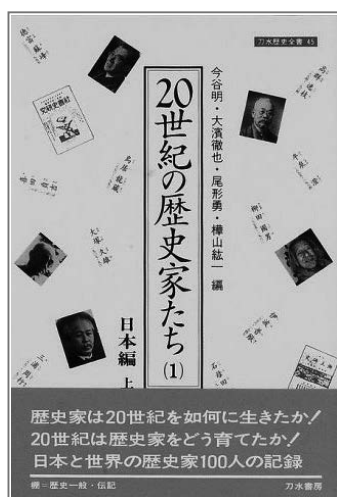
ただ、その人のことを自分の側に引き寄せ過ぎてしまつて、過度に同調すると、今度はその研究対象の見方しかできなくなるので、その間でバランスを取るべきだという話をされていました。それが、『自分のなかに歴史をよむ』ことだそうです。

高林…卒論や予備論文をやる中で、完全に自分と切り離れた他者だから語ることのできるストーリーもあるとは思うんです。生きてる人を目の前に言うっていうのは、何か評価するみたいなどころがどうしても出てきてしまうと難しいでしょう。でも一方で、おっしゃるように、完全な他者として切り離して考えるなんて、そんなにデジタルにはできない気がします。どこかで個人的なモチ

ベーションがあつて、研究対象とつながつてくような感じがするから、あるテーマに行きつくのだと思います。そうした距離感つてとても難しい。でも、面白いところですね。

田中…わたしは、今谷明ほか編『二〇世紀の歴史家たち

第一巻 日本編 上』（刀水書房、一九九七年）を選びました。この本の内容は、二〇世紀日本の歴史家の群像伝とか、個別具体的に、歴史家とその研究、歴史家個人の人生を描き出すものです。例えば、徳富蘇峰、石母田正、原勝郎など、戦後歴史学の「レジェンド」とでも言うべき人たちです。この本は、歴史家の名前なんて専門的に勉強していなければ知らないはずの人たちを、数ページ、あるいは十数ページほどで、その研究や人生をまとめているのですが、その点はとても歴史学的だと思っています。しかも、歴史家の歴史というのは、こういう人がいたんだと知っておくこと自体がそもそも面白い。人生が研究にもつながってくることも面白かった。こういう本を読んでも面白く感じられるというのが、ひよっとしたら教養というものかもしれないと考えました。



今谷明ほか編『二〇世紀の歴史家たち 第一巻 日本編 上』（刀水書房、一九九七年）

高林…みなさん、高校では教科書で歴史を学びますよね。あれほど書き手が見えない書物も珍しい。みなさんは、そこに書かれている「正しい」歴史の事実を学べ、と言われるわけです。教科書の末部に著者の名前は書いてありますけど、著者がだれであろうと、書かれている正しい事実を学ぶという「大前提」はやはり厳然としてあるように思います。でも、大学に来ると、もう事実、事実とは言わなくなる。事実と言われていることの裏には、論文などの研究があつて、それを書いている歴史家がい

て、歴史家は史料を読んでいて、という構造が突きつけられるわけです。だから、歴史家の話っていうのは、歴史学において大事なパーツだと思います。

松原…もうちょっとかみ砕いて教えてください。普通の学部生にとっては、まずそもそも歴史の本を読んでもさういって言うのはハードルだと思います。その上にさらに、歴史家の歴史とか、「どんだけお前ら歴史好きなんだ」「あんたら歴史オタクだからそういうの好きなんじゃないの」とか言われてしまうかもしれない。でも、そういうことでもなくて、読んでみたらけっこう面白いっていうことですよね。なぜなんでしょう？

田中…単に論文を読むと、書き手がどこで生まれて、どこで育って、どういう大学に行って、どういう人が周りにいて、ということは全く見えてこないと思います。でも、この本を読むと、実際には書き手は、ある時代の、ある社会を生きていて、その中で必死に考えながら書いていたことがわかり、そこに人間味を感じます。歴史の論文が無味乾燥な話ではなくなります。そういう体験はこういう本じゃないと得られないと思います。

松原…今の話は、さっき青木さんが言っていた阿部謹也の自伝的著作が意外に面白かったという話と似ていますか？

青木…似てると思います。思ったよりも人間味があるというか、何か自分に身近な存在として、思ったよりも自分に近いところにあるという感覚がもてるのが面白いと思います。社会問題や日常のことなどについても考えていることもわかる。論文だけだと堅苦しいっていうか難しいのですが、歴史家たちの伝記や自伝は、そこへの入口になる感じがします。

高林…『二〇世紀の歴史家たち 日本編』に話を戻しましょうか。

田中…『二〇世紀の歴史家たち 日本編』に出てくる、石母田正の『中世的世界の形成』（岩波書店、一九八八年・初版一九四六年（伊藤書店））が、戦時中に書かれたという点は面白かったです。

松原…テーマは日本中世の荘園の話を克明に書いているんだけれども、書かれた時期が戦時中ということもあって、

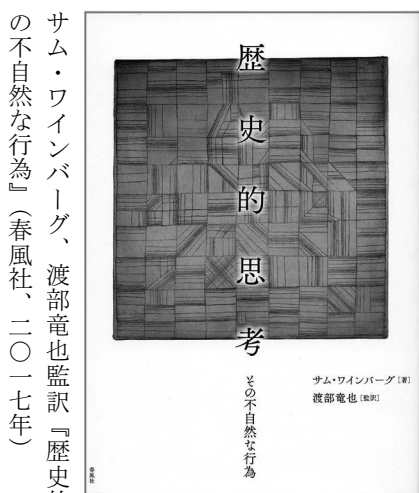
言いたいことが言えない日本社会の中で、遺言のように書いていくんですよね。中世のことを書いているようにいて、戦争に巻き込まれていく日本社会への観察だった異論だったり濃厚に書かれてる。

田中…戦時中に書いている一方で、大きな話としては、古代的な公家の支配に中世的な在地領主が抵抗し、しかし結果として負けていくという、革新的なものが古代的なものに駆逐されるというテーマを描いた著作でもあります。歴史の中で歴史が書かれてるっていう、感覚がすごく面白いと思いました。あと、石母田正の場合は、全集の月報に毎回、知人とか友人による短いエッセイが載っていて、それを読むのも結構面白いです。

### 「学部にかかわらず読んでほしい本」について

田中…私が選んだのは、サム・ワインバーグ、渡部竜也監訳『歴史的思考…その不自然な行為』（春風社、二〇一七年・原著二〇〇一年）です。この本の対象読者は、歴史教育にかかわる中高・大学の教員だと思います。もっと言えば、歴史が嫌いな学生を抱える先生にむけて、どうすれば歴史に興味を持ってもらえるように教えられ

るかを考える本です。中高で歴史系科目を必修になっている現状で、歴史系科目が好きな人は、ほっといてもやるのでしょけれど、嫌いな人に対して学ぶ意義を伝えることって大変なことなんだという感想を持ちました。周りに歴史が好きという人が多いのが史学科ですが、他の学部だと、歴史が好きじゃないっていう人もたくさんいるんだという、当たり前のことを考えることができました。



サム・ワインバーグ、渡部竜也監訳『歴史的思考…その不自然な行為』（春風社、二〇一七年）

松原…この本は、歴史系科目の教員がいかにして、歴史嫌



いの学生に魅力を伝えることに失敗しているか、なぜ歴史系科目を勉強するべきかを納得していない人たちに対して、特殊な歴史用語をとにかく覚えとけよというスタイルをとることで失敗しているということを批判している、なかなか強烈な本です。

田中…この本は歴史の教員向けなので、学部にかかわらず読む本というテーマにはふさわしくないのかもしれない。ただ、歴史のことを嫌いな人はいる。でも、勉強しなければいけない。嫌いじゃなくなる、あるいは少しでも歴史を学ぶ意味を感じられるにはどうすればいいのかというテーマは、学部にかかわらず読む本ということに通じるのかなと思いました。

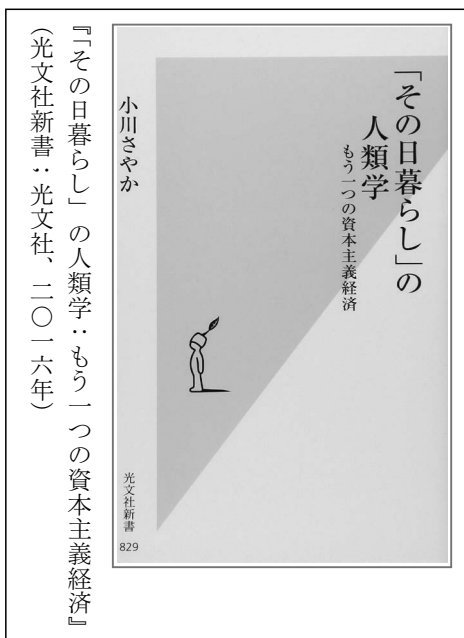
青木…私は、文化人類学者小川さやか『その日暮らし』の人類学 もう一つの資本主義経済（光文社、二〇一六年）という本を選びました。この本は、中国とかタンザニアの貧困層の人たちの生活を人類学的な視点から考えるものです。この本を選んだ理由は、わたしは文化人類学がすごい好きで、異文化コミュニケーション学部の奥野克己先生の『ありがともごめんなさいもいない…森の民と暮らして人類学者が考えたこと』（亜

紀書房、二〇一八年）っていう本もすごい好きで、文化人類学ということでの本を選びました。

この本の面白いところは、例えば中国については、映画の海賊版や音楽作品の違法アップロード、有名なマスコット・キャラの盗用のような知的財産権の問題があって、日本の人からすると、なぜそういうことをするんだろうっていうふうに思いがちだと思います。そのうえで、この本を読むと、中国とかタンザニアの人たちにはそうせざるを得ない事情があることが見えてきます。日本はやっぱり今でも比較的裕福な国で、「地下経済」を見なくて済む、見なくても生きていけるような社会を生きていると思います。一方で、この本では、「地下経済」で生きざるを得ない人たちがそれぞれの生活をとっても必死に考えているさまが生き生きと描かれていました。

私にとってこの本は、『ハーメルンの笛吹き男』や網野善彦『宮本常一』『忘れられた日本人』を読む（岩波書店、二〇一三年・初版二〇〇三年）にも通じるところがあるような気がします。先進国的な、あるいは近代都市的な価値観や経済のあり方から漏れ落ちてしまう人たちにとって、幸せに生きることとはなにか、何でもかんでもきれいにできてしまっているのだろうか、という感想をもちました。

私は、こうした関心から、アメリカの都市計画を卒業論文予備論文のテーマにしたいと考えています。近代の都市計画では、資本家や中産階級の人たちの意見だけが聴取され、街の整備のあり方、都市の財政のあり方が決められていきます。すると、そこからどうしても漏れ出てしまう人がいる。これは、人類学と史学でつながるところなのかなと思います。

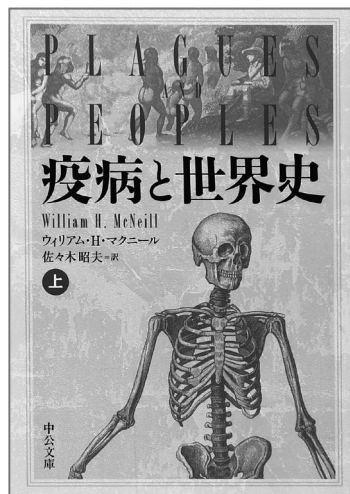


『その日暮らし』の人類学…もう一つの資本主義経済』  
(光文社新書…光文社、二〇一六年)

松原…人類学にせよ、歴史学にせよ、今われわれが生きて、これ以外にありようはないはずだと思っている世界

のありようとは違うものをぐっと見せてくれるのは、一つの魅力ですね。それは、自分が知らないインフォーマル・セクターの、インフォーマル経済の中の人から得ることもあるし、中世の公家たちの問題で気が付く場合もある。本を読むときに、自分の身の回りにある近さだけで楽しむわけじゃなくて、少し離れて見るとか、異質なものを見るとか、ずらして見たりすると面白くて、手が伸びる本が増えたりするのもかもしれません。

鈴木…私は、ウィリアム・H・マクニール、佐々木昭夫訳『疫病と世界史』（中央公論新社、二〇〇七年…初版一九八五年（新潮社）…原著一九七六年）を選びました。この本を選んだ理由は、世界史っていう言葉が入っていたからです。ただ、歴史の話というよりは、科学や理料系の知識がないと、読むのがかなり難しい本でした。なので、医学とか病気に興味のあるマニアの方が読んだら、とても楽しめるんじゃないかなと思いました。それが、学部によらず読む本に挙げた理由です。



ウィリアム・H・マクニール、佐々木昭夫訳『疫病と世界史』（中公文庫…中央公論新社、二〇〇七年）

高林…これは、私が選んだ本です。今おっしゃられたとおりで、この本は、高校までで学ぶ、いわゆる「世界史」ではありません。私たちは、歴史とか世界史と言うとき、人を中心に据えることが多いと思います。それに対してこの本の主人公は、病気、もつといえは病原体です。一般的な歴史の叙述では、アレクサンドロスがどこからどこに移動して、と語るところを、マクニールは、病原体を中心に移動を語るわけです。ですから、確かに、一般的な歴史に興味を持って、世界史の教科書を読んできた

史苑（第八〇巻第一号）

人がすぐに面白いとは思わなくてもいい。理系的な思考の人が過去のことを考えていくときに手助けになるっていうのは、そうかもしれない。それでも、なにか面白かった箇所とかがありましたか？

鈴木…私は、疫病について聞くと、まずヨーロッパが浮かんでしまいます。例えば、コレラです。この本はそうではなくて、モンゴル帝国の移動と疫病の問題とか、アメリカ大陸とヨーロッパ大陸のあいだでの病気の交換（コロンブスの交換）という問題が出てくるのが、新たな視点とすることで面白かったです。

高林…「コロンブスの交換」は、他の方々に説明してもいいかもしれないです。

鈴木…一五世紀末のコロンブスによるアメリカ到達以降、ヨーロッパとアメリカ大陸の間で交易が広がるわけですが、コロンブスらヨーロッパの人たちがアメリカに行くことによって、それまでヨーロッパが経験してきた病気、ヨーロッパにしかなかった病気（天然痘、はしかなど）が、航路を介してアメリカに行くことになる。そうすると、抗体を持ってない、アメリカの原住民の人がどんど

ん死んでしまう。アメリカ大陸からもヨーロッパへ逆に病  
気（梅毒）が伝えられる。そういう疫病の交換のことです。

松原…片やヨーロッパはアメリカ大陸から富をもらうの  
に、ヨーロッパの側がアメリカ大陸に持ってきたのは病  
気であって、その結果としてほぼ絶滅するという毒のあ  
るタームでもありますね。病原菌に寄り添うと、今まで  
見えていた「世界史」が一変する。これは、高校の歴史、  
あれだけが歴史だと思うと全然違うってことになるとい  
う、歴史学の幅の広さを知るには、格好のテキストになっ  
ているかもしれません。

青木…ユヴァル・ノア・ハラリ、柴田裕之訳『サピエ  
ンス全史…文明の構造と人類の幸福』（河出書房新社、  
二〇一六年…原著二〇一一年）も似たようなところがあ  
りますね。

高林…病原体を主人公にするというのは、やはり面白い視  
点だと思えます。コレラ菌は、元々はインドのベンガル  
湾にしか存在せず、一九世紀初頭までは風土病でしかな  
かった。その地域を出ることのできない病原体だったん  
です。それが、イギリスの軍隊・兵士が来て、開発が進

んでゆく過程で、おそらく宿主と環境面での変化が生じ  
て、徐々に北半球へ進出できるようになる。突然変異し  
たとも言われています。その瞬間のコレラ菌って、どん  
な気持ちだったのかな。

鈴木…すごい喜び？

### 「読んでほしい専門の本」について

青木…選んだのは、エドワード・W・サイード、大橋洋  
一訳『知識人とは何か』（平凡社、一九九八年…初版  
一九九五年…原著一九九四年）です。この本は、超域文  
化学専修の山下王世先生の選書です。最初に読み始めた  
時は、内容がよくわからなかったです。なぜかというし、  
反権威主義的というか、研究者の言っていることは必ず  
疑ってかかれというようなことが書かれていて、それが  
ちよっときつ過ぎると感じたからです。ただ、栗原康と  
いうアナキズム研究者の『アナキズム…一丸となつて  
バラバラに生きろ』（岩波書店、二〇一八年）という本  
を読んだから、『知識人とは何か』に戻ってきました。意  
外とすんなり読めるようになっていました。サイードの  
言っていること、分かるなって思えたりもして。



エドワード・W・サイード、大橋洋一訳『知識人とは何か』  
 (平凡社ライブラリー…平凡社、一九九八年)

高林…私も読みました。

松原…反知識人口調ですね。

青木…自分の研究テーマとの関係で言うると、二〇世紀初頭のアメリカの都市計画について研究しているんですが、そこでは、知識人や支配的な階級の人たちに主導されて、ゾーニングと呼ばれる、社会階級に応じた区画分けが行われていました。でも、ゾーニングはもともと、ベンジャミン・マーシュという人がヨーロッパから最初に借用

史苑 (第八〇巻第一号)

したもので、それは、貧困層や、頑張って働いてるけど大した賃金が得られない労働者の人たちを救うためのアイデアでした。しかし、『知識人とは何か』を読むにつれ、知識人や専門家が変わってしまったのではないか、彼らが考えたことを疑うべきではないか、そう思うようになりました。

松原…植民地支配でも同様のことは起きますよね。植民地支配は被支配地域にとって恩恵であるという言い方とかを、何も強欲な政治家や軍人が言うだけでなくて、実にしばしば知識人や小説家がそのとおりだと言ったりして、当然かのように受け入れるしかないようにも見えてゆく。それが、エドワード・W・サイード、今沢紀子訳『オリエンタリズム』(平凡社、一九九三年…初版一九八六年)で描いたことの一つの局面だと思うんですね。

高林…ほかの方はサイードの著作を読みましたか？

鈴木…博物館概論で読んだ気がします。

鈴木…私は、角山榮・川北稔編『路地裏の大英帝国…イギリス都市生活史』(平凡社、二〇〇一年…初版一九八二年)です。簡単に内容をお話すると、ヴィクトリア時代イギリスの生活について、食、病氣、チャリティー、都市構造、

レジャーなど様々な視点から考察している本です。この本は、とても読みやすかったです。なぜ読みやすかったのかを考えてみたんですけど、私が内容を既にある程度知っていたということもあるんですが、それ以上のなにかがあったようにも思います。イギリス史研究として専門的でありながら、でも広く浅く描き出しているようにも感じました。もし一九世紀イギリスを研究したい方がいらっしゃったら、この本を読んで、どこが面白かったかっていうところから、さらに進んでいけばいいんじゃないかなと、お薦めしたい本でした。



角山榮・川北稔編『路地裏の大英帝国…イギリス都市生活史』（平凡社、二〇〇一年）

高林…この本がなぜ分かりやすいかは、もう少し掘り下げたいところです。

鈴木…たぶん、一つ一つの章（トピック）としても十分に面白く読めるんですが、それが、全部通して読んでみても、すごいつながってて、理路整然としていて、何か納得できるというところだと思います。それが、もしろいけど、簡単にも感じたということではないかと思えます。

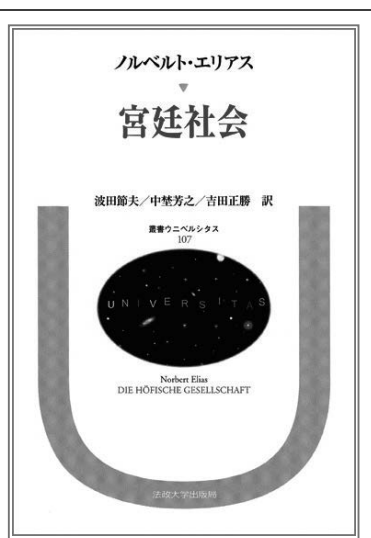
高林…この本は、不思議な魅力がある本です、学部一年生や二年生の授業でよく使いますが、学生から常にもいい反応が得られる貴重な本です。この本で、反応が得られなかったことがほとんどない、という印象です。

鈴木…ひとつ思ったのが、結構スキャンダラスな話が書いてあることも面白さを感じるところかもしれません。ヴィクトリア時代のきれいなこと、いい側面だけじゃなくて、さっき話に出てきた、あんまり良くない部分、全然整備されてなくて、みんな苦しんでたよ、みたいな部分とかも載ってるので、そこが魅力として、読みやすいのかなとは思いました。

田中・私は、ノルベルト・エリアス、波田節夫・中楚芳之・吉田正勝訳『宮廷社会』（法政大学出版局、一九八一年・原著一九六九年）を選びました。一七世紀フランスの宮廷社会を対象とした本ですが、日本史の研究よりも、私の研究テーマの参考になったところがありました。この本では、ルイ一四世を頂点とするフランス宮廷社会では、王は家臣とは隔絶した絶対的な地位にいて、何でも好き好き勝手にできたわけではなくて、自らも宮廷というシステムの一部として、日々そのシステムの維持に尽力しなければならなかったということを論じています。具体的には、細部に意味が込められた儀礼や邸宅を通じて、宮廷社会を動かしてゆきます。

私は、古代の最末期から中世初期にあたる院政期という時期を研究しているのですが、天皇をトップとする公家社会の中で、儀礼は数多くあり、それを誰が参加しているとか、誰がどの役回りをこなしているというのが、家レベルでも、国家レベルでも問題になってきます。その頃に、貴族の中では日記が流行ります。なぜかという点、日記に、どの儀礼はどういうふう to 実施されたかというのを書いておいて、次の世代に伝えて、同じ儀礼をしつかりとこなせるように伝承するためです。そして、その秘伝の日記の存在をもって、宮廷内の特定の役回りが特定

の家に固定化されてくんです。そういうこともあって、時代も場所も違うのに、エリアスには共感しながら読みました。例えば、貴族が乗る牛車に付けられる飾りも、家のランクに応じて全部緻密に決まっている。位階という、天皇への距離感を明確にした指標を伴って、システムティックに構成されているんです。それは、エリアスの『宮廷社会』でも言及されていると思います。



ノルベルト・エリアス、波田節夫・中楚芳之・吉田正勝訳『宮廷社会』（法政大学出版局、一九八一年）

高林…少しエリアスについて補足しましょう。教科書的に

は、一七世紀のフランスやイギリスの王政のあり方を、絶対王政と呼ぶことがあります。実際にフランスの一七世紀の一番華やかだった頃と言われる、ルイ一四世の宮廷を見ていくと、国王は常に盤石な権力を持っていたわけじゃなくて、貴族に打倒される可能性もまだあった。ただ一七世紀中ごろになると、貴族が経済的に困窮し始めて、王のお金に頼るために宮廷に集まるようになる。そして、王の寵愛を求めて貴族同士で争いをしてゆく。王はそれを見て、貴族同士を争わせておけば、自分の立場は安泰だろうと考える。そうして、権力バランスを調整していた。つまり、絶対的な権力を行使したのではなくて、細かな調整と駆け引きこそが宮廷社会の特質だと論じたものです。

それを、日本史の視点から見るというのは、日本史だと当たり前だったことが、フランス史という視点を導入して見ることで、よりくっきりと浮かび上がる、それまでとは違う表現ないし整理の仕方を獲得するということになるのかもしれない。そういう活かされ方は、エリアスも本望ではないかと思います。

高林：今日は二時間ほど、みなさんのお時間を頂きました。話は尽きませんが、今日のところは、ここまでで。